

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.91 2021年1月10日発行  
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369  
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

## 第22回定期総会を開催

「京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間」の第22回定期総会を2020年9月27日（日）にスペース京浜（京浜協同劇団稽古場）で開催しました。

文化の仲間事務局長 山木 健介

新型コロナウイルスの脅威の中ですが、密にならないように注意しつつ開催し、21名の方が参加されました。

総会での発言は以下のとおりです。

「平和憲法作品展は、見に来てくれた人が少なく残念。素晴らしいギャラリーができた。もっと広げて演劇人の展示会をやったらどうか」

「文化の仲間の『結成宣言』に、劇団の稽古場がジャンルを越えた文化の砦になることを切望してやまないがあるが、11月公演はジャンルを越えた公演に結果的にはなっている。この稽古場で、みんなが趣味を、やっていただくと良いなと思った」

「平和憲法作品展だが、早く次回の呼びかけをすれば、次回のために作品を作らなければならない人がある。ピアノもあるし、漫才などもできるので、展示するだけではない展示会をやってはどうか」

「作品展は、町内会の老人会にも呼びかけたらどうか」

などの意見が出されました。

ほとんどが平和憲法作品展（3月20日から3月22日開催、会報 No.90 既報）に関する発言でした。コロナの中なので、作品出品者を文化の仲間と劇団員および知り合いに限定し、参加呼びかけも文化の仲間と劇団員にチラシを配るだけにしましたが、せっかく素晴らしいギャラリーが出来上がったのに、参加少数で

残念でした、という意見が多数意見でした。2回目をやる時は、コロナが収束した後に、規模を拡大し広範囲に呼びかけをする企画を検討します。

総会の最後に、「世話人」（役員）を選任しました。全員留任です。（敬称略）

二村柊子・高橋明義・藤崎秀子（以上代表）山木健介・須田セツ子・西川日女子（以上事務局）小野寺晃・佐藤友吉・常名孝央、橋本教善の10名です。

なお、世話人の小野寺晃さんは、元気いっぴいの89歳ですが、11月9日に娘さん夫妻が店をやっている沖縄の宮古島に移住されました。

総会終了後に、総会記念企画として、作家の中野慶さんの講演がありました。

中野さんは、「戦争体験の継承はなぜ困難か。憲法9条を論じる際の壁とは何か…『網の目』を意識すれば、日本社会が見えてくる」と題して講演されました。お話の中で、興味深かったのは馬の話です。馬が軍馬として大量に戦地に送られ、日中戦争期には50万頭以上が戦地に送られたが、戦地から帰還した馬は皆無に近い。その中で、勝山号という馬は部隊長の馬になり、負傷したが奇跡的に助かって帰還した。軍馬甲功章を受章し、1947年に14歳で死亡した。馬を愛した庶民はなぜ戦争に協力していったのか、など多岐にわたるお話をしていただきました。



京浜協同劇団 第 94 回公演

# コロナ退散！笑劇場 開催しました

新型コロナウイルスが蔓延し、閉塞感が漂っている時期でしたが、笑ってストレスを発散しようと企画された公演が 11 月 21 日～ 29 日に開催されました。朗読、腹話術、漫才、落語にマジック、狂言芝居があり、大道芸、ピアノ演奏と多彩な演目で盛り上がりました。出演者や観客の方に感想をいただきました。

## お笑い、たらふくいただきました！

赤石 ひろ子

世界中に憎らしいコロナが蔓延。私たちの生活に手かせ、足かせを、どんどんはめていきます。あの緊急事態宣言から 8 か月、ダイヤモンド・プリンセス号のコロナ集団感染からはなんと 10 か月、人と会うこと



も、食べることも、話すことも、笑うことも、自粛自粛。この間、痛切に人恋しさ、笑い恋しさを感じたのは私だけではないと思います。やっぱり、人は人と居たいし、笑いや思いを共有したい、いきものなのだと思います。

京浜協同劇団の『コロナ退散！笑劇場』は、そんな、いまの私の気持ちにぴったり来る公演でした。コロナ禍での休演続きで苦境にありながらも、今回の興行にこぎつけた劇団魂にはひたすらリスペクトですが、テーマが「笑い」というところがまた、愉快痛快ではありませんか！ 私の脳裏にすぐに浮かんできたのは、



幼いころ夢中で観ていた TV 人形劇『ひよっこりひょうたん島』の主題歌。♪ 苦しいこともあるだろさ、悲しいこともあるだろさ、だけど僕らはくじけない 泣くのは嫌だ、笑っちゃお♪ このフレーズ、不思議と元気が出ませんか？ そうです。こんな時こそ、「笑い」の出番なのです。

そして、「笑い」を誘う日本の芸能が、じつに多彩なことにも驚かされました。今日のステージは、さながら「笑いのレストラン」だと思いました。ポケとツッコミのギャップが楽しい「そのこ&トシちゃん」の漫才に始まり、華やかなマリリンさんのおもしろマジック、狂言芝居「なろうことかな」では老若坊主の



好色バトルに抱腹絶倒、アクロバット大道芸では若さ溢れる演技に手拍子が鳴り響き、笑いをいっそう盛り上げました。どれもがメインディッシュになり得る笑いのオンパレード。大いに笑わせた後には、格調高いピアノの調べで締める。これはもう、お洒落なデザート♡ 笑いのフルコースをたらふく、そしておいしくいただきました。

おいしくいただけただけなのはもちろん芸のなせる業ですが、たぶん、スペース京浜という劇場のスケール感、空気感もプラス要素なのだと思います。臨席の人の気配を感じられる距離感、私は好きです。そして「この日、この地で、この人々と」という京浜協同劇団の劇団ポ



リシーには、いつもグッと来るものがあります。ステージは一期一会である、私はそう理解し、共感するのですが、私が演劇に強く惹かれた理由はまさにそこにあります。私と演劇の出会いは12歳のころ、労演がきっかけでした。労演の公演日は、父の運転する車で30分かけて、家族で県都前橋へ出かけます。家を出るときからワクワクして、私にとって芝居はすでに始まっているのです。じつは今日は、開演時間を間違えて多摩川で久々にのんびり。それを聞いた城谷護さんが「神様がくれた時間だよ」と言ってくれました。たしかに、心をニュートラルにできたからこそ、今日の「笑い」がいつそう心にしみわたったのでしょうか。ご馳走様でした！（11月22日の公演に寄せて）

（多摩区在住・川崎市議会議員）



「コロナ退散！ 笑劇場」に参加して

## 刺激的で面白かった

たけのうち  
竹内 陽子

私は、作曲家の安達元彦さん・岡田京子さん・そしてピアニストの鈴木たか子さんを通して京浜協同劇団の存在を知りました。公演を見たり、様々な催しに参加させて頂いて、京浜協同劇団には何度も足を運びましたが、今回安達先生（楽曲の分析をご指導して頂いていますので先生です）のお声がけで「コロナ退散！ 笑劇場」に参加させて頂きました。

演劇・演芸・大道芸など、普段コンサートの楽屋では決してすれ違うことのない方々と触れ合った時間は、刺激的で面白かったです。

物を創り上げていく作業は、目の前にある材料や道具が違って、音楽と通ずる物があると思いました。それぞれが自分たちの芸と向きあい、本番に向けて切磋琢磨を続けていく姿に熱いものを感じました。

漫才・落語・マジックなど、皆個性的で面白かったですし、朗読や狂言はよく研究なさっていて、それを



消化し表現していらしたので面白く、引き込まれました。

腹話術は流石ベテランですね。話術やエンターテインメントも巧みで、思わず笑ってしまいました。

腹話術の最後に紹介されて出ていらした鬼丸ゆりさんの岩手弁での宮沢賢治の詩の朗読は、味わい深く心に残りました。

「ピアノとともに」は、いつも大道芸の後で、大道芸ですっかり会場が盛り上がった中で、“もう帰っちゃおうかしら”等とふと過<sup>よぎ</sup>ったりもしましたが、“音楽は別の世界”と気持ちを切り替えて舞台上に上がりました。

演奏が終わった後で「癒やされました」とか「感動しました」等とお声を掛けて下さる方たちもいらして、ホッとしました。音楽の持っている力を、少しでも引き出す助けができれば嬉しいです。

色々な出し物が入り代わり立ち代わりで、スタッフの方たちは大変だったのではないかとお察し致します。お世話様になりました。ありがとうございました。

コロナウイルスが広がっている現状で、クラシックのコンサートも色々な気配りが必要だと思えます。12月13日にリサイタルを予定している私にとって、参考にさせて頂けることが沢山ありました。前列に座っていらっしゃるお客様にはフェイスシールドをお配りするよう既に購入しました。舞台上での飛沫飛散防止の亚克力板の設置も大変参考になりました。

来年以降まだまだ先が読めない状態ですので、今で





きることをできるだけの注意を払って、コンサートを行いたいと思っています。また、これから先のコンサートの在り方も模索しています。

演劇、音楽など、舞台に関わる仕事をしている人間にとっては受難の時かと思いますが、何とか乗り越えて行きたいですね。早くコロナが落ち着いてくれることを、祈るばかりです。

このような貴重な機会を頂いたこと、またこの公演に携わって下さった全ての皆様に感謝致します。

(ピアニスト・協力出演者)

## 笑うということ

石倉 勲

一、京浜協同劇団の秋公演は「コロナ退散！笑劇場」と銘打つものだった。観劇し、大いに笑い、楽しみ、拍手をして帰途についた。

順番をつける意味ではないが、大道芸のパフォーマンスが楽しかった。あれだけの演目？を続けて観る機会は滅多にないが、見事な芸に感心し笑いがこぼれお見事！と拍手が沸いた。プログラムによれば5組5種のパフォーマンスがあったようで、私がみたお手玉もどきの芸一つとっても、トレーニングを重ね、舞台上での本気度も感じての熱演に感心した。普段どういう場所でパフォーマンスしているのだろうか。寅さんも



もどきで、全国のお祭りイベントを追いかけてるんだろうか？ それにしてもスペース京浜を稽古場にしてるといのは驚きでした。

落語を題材にした狂言（もどき）も笑った。村の坊さんという尊敬の対象が、実は人の子であり、色気も欲もある（「なろうことかな」）。素材の面白さを発揮したものだが、観客の多くがそうかも知れないナと感じながら、狂言に仕上がった舞台を楽しみ笑う。その面白さを組み立て、引き立てるのは俳優たちの稽古を積んだ演技とともに、脚色の力量だろう。脚色を担った蒔村由美子氏も元劇団員という。劇団の総合力が発揮された舞台だった。

二、笑うということの大切さを味わった気がする。私たちが表現するテーマは得てして悲しみであり、怒りである。収穫のよろこび、婚礼や出産の祝いもあるが



笑いがなかなか表現できない。他人の弱みを子馬鹿にして笑うというのはここでの笑いではないし、オヤジギャグでニヤニヤするのもほんのひとときの慰めであろう。私たちの生活の中に喜怒哀楽があふれているのだから、笑い合って大きな新しいエネルギーを創りだしたいものだ。「朝ごはんは食べなかった。パンを食べた」という朝ご飯論法（これもオヤジギャグ？）を笑い飛ばし、市民が支配者、権力者のずる賢い逃げ口上を笑いをもって見抜けば、新たなエネルギーも湧きあがるのではないだろうか。私はうたごえ合唱団の一員ですが、うたごえ運動の機関紙「うたごえ新聞」にも木津川計さんの「笑いの灯」欄があり毎週その連載コラムを読み楽しんでいる。

三、京浜協同劇団はアマチュア団体でしょう。ここでアマチュアというのはしろうとという意味ではなく、商業的演劇集団ではないという意味ですが、追い求めている舞台表現は「人々と生きる」ことであり、生身の人間が生きる姿でしょう。60年を刻んだ舞台の歴史がそれを語っているし、そこにプロ・アマの隔たりはありません。そうした人間集団は、舞台上の俳優の



みが生み出すのではなく今回の舞台が示したように、脚色、音楽、舞台美術など多くの関係者を包容する人間集団の結集として生み出すことができるものでしょう。50名ほどの観客のためにバス停で案内に立つ「文化の仲間」たちの支援もそうしたエネルギーを構成する一つでしょう。京浜協同劇団、「共に歩む文化の仲間」の営みがますます生き生きと続くことを願っています。  
(横浜市在住)



京浜協同劇団第 94 回公演「コロナ退散笑劇場」に参加して  
「まあ、楽しんでらっしゃい」などと励まされ

川西 玉枝

7月に公演予定だった「ガンバと15匹の仲間たち」は、来年に延期、11月にお誘いを頂いていた「おりん」は中止に。

コロナのせいで目標を見失っていた所に、狂言芝居「お告げの妻」を、小川がこうさんと一緒に如何ですかのお誘い！ 渡りに船とはこのこと。二つ返事でお受けしました。

この時期に表現の場を頂けるのは、嬉しいことです。稽古の始まるのが待ち遠しく、始まればいそいそと通いました。「お告げの妻」は20分程の作品です。また、私の役は共演の小川がこうさんの半分程の台詞量。稽古期間はふた月。何とか覚えられるだろうと胸算用。立ち稽古が始まりました。

狂言芝居「お告げの妻」は、「因幡堂（いなばどう）」という狂言を脚色したものです。

実は今年の1月頃、横浜能楽堂で演劇鑑賞会の例会でその「因幡堂」を茂山家が上演しており、私はそれを観劇していました。それを自分が狂言芝居として演じることになるとは、何という巡り合わせなのでしょう。その時の記憶を引っ張り出して何とか立ち居振舞いしてみようと試みましたが、それはおおよそ無理な



話だということを通じて理解することになるのですが……。そして内山八重子先生の登場となります。

足の運びに始まって、構えの形、手の動き、腰の落とし方、足先の向き、その他その他あらゆる所作の様々を「前で見なさい」と、お手本を見せて下さいます。そのひとつひとつが見事に美しく見惚れてしまいます。必死になって真似ようとしますが、どうにも様になりません。

名優の名を欲しいままにした歌舞伎の六代目菊五郎に幼い頃から師事して来られたものが、一朝一夕に真似られるものではない訳で……。それでも、その形を知っているのと知らないのとでは、大きな違いがある訳で、先生の教えを虚しくする訳にはいかない訳で……。その頑張りがこの度の公演に反映できたとすれば、この上ない幸せでございます。

実は、この上なく優しいお客様方が、アンケートに様々なお褒めの言葉を下さりまして。勿論反省しなければならないことが沢山あるということは自覚の上のことですので、お許しを頂かなければなりません。少しだけ、良い気にさせて下さい。

ただ、稽古はどんなに多くのものを得られたとしても楽しいことばかりではなく、落ち込んで情け無い思いを抱えていたりするものです。そんな時「まあ、楽しんでらっしゃい」などと励まされて、肩の力がスッと抜けたこともありました。

因みに励まして下さったのは藤井さんです。その節





はありがとうございました！

また、公演中に沢山の美味しいものを頂きました。これもとても嬉しかったです。また、機会があればご一緒させてください。ありがとうございました。

(協力出演者)

## 日本中世界中にエネルギーを届けられるよう

我々パフォーマーは普段、個々での仕事が多いのですが、この度の公演では劇団の皆様をはじめ、多彩な出演者の皆様とご一緒させて頂き、とても貴重な経験となり刺激を頂き勉強になりました！

また日頃、練習でお世話になっている稽古場の劇団の皆様にも、我々のやっていることを知って頂くことができたこと、そしてこのコロナ禍の中、沢山の皆様にご挨拶とエンターテインメントをお届けすることができ、とても嬉しく思います！

コロナで世界中が元気を失っておりますが、エンターテインメントの力を信じ、今後もスペース京浜で技術を磨き、日本中世界中にエネルギーを届けられるよう精進していきたいと思っております！！

大道芸出演者一同



## お客さんは公演を待ち望んでくれていた！

和田 庸子 (演出・司会)

440 名のお客さんをスペース京浜に迎え、司会者として全 10 回を会場で過ごしました。

「楽しかった！」「来てよかった」「いろいろなものを観られて、おもしろかった」「コロナ対策、よくやったね」等々、お客さんが次々に声をかけてくれました。公演一週間後、近所の赤坂さんも「あれだけの演目を準備するのは大変だったでしょう？ いま、なんでも中止ばかりですもの、久しぶりにストレス発散できたわ」と玄関先で感想を伝えてくれ「芸を見せる楽しさ、芸を見る楽しさ、そしてその場を用意する協同劇団の貴重な役割ということにあらためて共感しました。緊張感あふれる大道芸はちょっと衝撃的でした。ピアノもよかった、狂言(もどき)も。マジックマリリン



は隙だらけでしたがそれも魅力的でした。コロナ禍の中で公演を作り上げ、演者と観客の交流を作り上げたご努力には頭が下がります」というアンケートも送られてきました。

制作も大奮闘

入場者数は当初の目標 400 を上回る数字です。いつもの半分に客席をしぼったものの、お客さんが本当に来てくれるのかしら？ 準備してきた企画・演目を喜んでくれるだろうか？ 劇団のコロナ対策を納得してもらえるだろうか？ なにしろ、企画も劇場の作り方も初体験＝コロナ退散！笑劇場なのです。



結果としては私たちの悪戦苦闘がお客さんにしっかり伝わったことを確信できる会場の空気であり、共感とねぎらいの言葉の数々をいただけたと思っています。

どんな悪戦苦闘があったのか。なにより毎日バラバラで行う稽古の大変さ。護柔・和田＝漫才、落語、狂言2本、「ピアノとともに」「大道芸」との打ち合わせを日々進めました。たとえば夜6時から「おかげ」、



7時半から「なろう」同時進行、9時半から演出班会議。土日5時から「漫才」もあれば平日2時から「落語」もやりました。藤井さんは瀬谷さんの「朗読」を担当。各稽古の様子を知らせるニュースも作りました。制作班はチケット予約だけでなく「感染症対策」「新しい受付のあり方」を探究しました。コロナ感染の拡大で一度予約してくれたお客さんがキャンセルになるという事態も多くの出演者が経験しました。



### 劇団の7演目

漫才「そのこ&トシちゃん」は護柔一が二人のために書いた台本。「漫才は会話なんだヨ、そのちゃんのはセリフだ、それじゃ漫才にならない」「大谷さん、自分のつくった川柳はしっかり言おうヨ」とビシバシダメが飛び、本番ではお客様の前で真っ白になることもしばしば。本人たちは「ヤッター！」と思えたことなんか一回もなかったかもしれない。でも呼吸はだんだんイイ感じになって来た(?) そのこさんはフルタイムの労働者、労働組合の代表として要求書をまとめたり、お母さんの介護もしている。会場から「そのちゃ



んガンバレ！」と声が挙がった時はうれしかったナ。

狂言は内山八重子先生の指導を受け大いに学びましたが、夜おそく横須賀にお帰りになる先生を客演の川西玉枝さんが横浜まで送って下さったのはとてもありがたいことでした。

腹話術の城谷さんは制作初チーフの藤井さんを支えました。

### 「大道芸」「ピアノとともに」

「大道芸」と「ピアノとともに」が今回のプログラムに入ったことは、お客様から大変喜ばれました。両方も何度も打合せをしました。大道芸は日替わりメンバーによる合計10人の演技。大いに人気をさらいました。息を呑むパフォーマンスに「涙が出てきました」と書く人も。そのあとに『ピアノ』が演奏されるというプログラムは意外に楽しんでもらえたように思います。3人のピアニストが毎回違う曲でのぞみ、最後の歌も10回皆違う。ピアニストのご紹介以降は、安達元彦さんがリードしてくれました。「うまくいかどうかわからないが今回はこんなふうにやってみよう」と決めたのです。「この時期歌うのはいかがなものか」とアンケートで疑問も投げかけられましたが、小さな声で静かに歌いながらジ・エンド。若菜さんの元気なごあいさつで幕を閉じました。

お客さんとの交流会や打上げもできませんでしたが、皆で力を合わせ、開けっぴろげな創造精神でお客様に向き合った公演になったのではないのでしょうか。

(京浜協同劇団)



連載 「京浜協同劇団」と私——第13回

# 統一劇場(現代座)が生まれるまで

岡田 京子

ここで、現代座座長の木村快さんのことを少し書いておきたいと思います。

快さんは1936年、植民地時代の朝鮮大丘市に生まれ、小学校4年の時、お父さんは補充兵として硫黄島に送られて戦死、敗戦後は母子6人で日本に引き揚げ、快さんは一人だけ広島の親戚に引き取られています。

原爆後の広島は、校舎の設備も満足になく、卒業するとすぐ働くことになります。チビで出っ歯だったから、友だちにいじめられるが、自分を守るためには無駄な争いはしない、というプライドを持っていました。

中学を出ると、日雇い労働者として、平和公園の造成現場で働きます。58年に上京し、江東区深川のドヤ街で日雇い生活をしていた時、友人に誘われて「新制作座」の公演を見ます。その後、遊びに来ないか、と誘われて行った時、劇団員が小道具の角火鉢を作るのに苦労しているのを手伝ったりしたので、「芝居は総合芸術だ」と言われて、補欠研究生として22歳の時芝居の世界に入ったと言います。他の研究生と違って、宮大工の頭領だったおじいさんの血を引いて、大工仕事も、配線の修理も、音響器材の操作などもできたし、自己流でギターやアコーディオンもやっていたからでした。

同期は21人いたが、ほとんど大学出で、理屈で話すことができない快さんは、いつもアウトサイダーで、自分の思っていることそのまましか言わなかったため、だんだん孤立していきました。

その頃演劇界は、本格的全国公演をする劇団がなかったから、新制作座は有名になり、60年代には150人を超す大劇団となり、同時にさまざまな人間的トラブルが起こるようになっていました。そして快さんも、必要あれば自分の考えを自分なりに発言したため、幹部からにらまれる存在になっていました。

そういう中で、新制作座は芝居をやるのではなく、歌や踊りを中心とした「新制作座フェスティバル」を持って全国公演を始めます。この企画や練習には私もかかわったのですが、「フェスティバル班」が始まると、「わらび座」の先を行ったように見えるこの舞台は、とても安易なものに見えました。こういう方向でいいのか、と思うばかりでした。でも、その意見を出せることはありませんでした。すべて眞山さんが決定し意見など出す方向は消されていました。

しかしそのフェスティバル班は、それを見た「インドネシア文化連盟」の要請で、「日本人民文化代表团」として、インドネシア公演が決定しました。「今度は逃げられない」と私は思いました。ここで木村快さんと話し合いができれば、きっと何かがわかり、自分の行動も、一歩が踏み出されたと思うのですが、それはできなかった。その時の私は、快さんと一面識もなかったのですから。

その時とった私の行動は、「劇団に行かない！」ということでした。劇団員ではなかったのですが、おいそれとやめられない立場に立たされていたのです。

「やめたい」という言葉が言えない雰囲気、それなら自分自身を消すしかない、という気持ちでした。私は会議に出ず、自宅にもいないようにしました。「必ず誰かが眞山さんの命令を持ってくるはず」私は家にカギをかけて、10日間ほど、高田馬場の裏通りにある小さな旅館で過ごしました。私が思った通り、この間、何度かの劇団員の訪問があった様子でした。

こういう辞め方がいいとは思いません。でも、結論を言いますと、4カ月後、インドネシアから帰国した班のほとんどの人(40名ほど)が、帰国後すぐ劇団を離れた木村快さんの後を追ったのです。それが、統一劇場の始まりです。

## 本の紹介

### 国際人権入門——現場から考える

シン ヘボン

申 恵 著 岩波書店(新書) 800円+税

国際社会が築いてきた国際基準に照らして、現在の身の回りの人権状況を検証し、人権問題を考えます。著者は、青山学院大学教授で認定NPO法人ヒューマンライツ・ナウ理事長。





劇団員による劇団員紹介 第10回—護柔—さんによる渡辺そのこさん紹介

# 36年後の再新人？ そのこサン

京浜協同劇団(運営委員長) 護柔 —



渡辺そのこさんは、「コロナ退散！笑劇場」で漫才を演じた女優サン。舞台でのお喋りは殆んど真実です。

「私、劇団員になっちゃった」「50過ぎて5歳だよ！」「現役労働者」など彼女の実生活を台本に盛り込みました。彼女にとっても大きな挑戦だったようです。設定されたキャピキャピのギャル。台本を手にした時、随分ちがう「そのこ」に戸惑っていたようです。

「……ウヘン？」と不安だった気持ちから「やってみようかな……やりたい、やります！」に変わってきたのです。相方との稽古も積極的に自分から呼びかけて、回数も一番多かったと思います。漫才は、最初から上手くいくはずはなく、日々台本を持ち歩いてセリフを憶えることから始めたようです。「この二人のコンビでどうなるのだろう？」団内にも不安(心配)な声があったが、親爺と娘の掛け合いは、きっと温かい笑いを届けてくれるはず、そう信じて稽古を重ねました。思いつきで台本を書き始めたらオモシロいように筆が走りだし、ほぼ一晩で出来上がった作品です。

かつて映画俳優を目指し青春を過ごした大谷サン、再び演劇の世界(劇団)に戻って自分が本当にやりたいことに挑戦するそのこサン、この二人が主役の短編になりました。今、TVなどで活躍している若手漫才コンビは、何年もかけて創り上げてきた独自の世界を認められた芸人たち。たった3ヶ月でお客さんを前に漫才するなんて無謀なことなのかも知れない。「自分のことばでしゃべって！」「台本のセリフから離れて、もっと自由に！」「何度も同じようなコトを言わせないで！」等々、ダメ出しが続く。

少しずつ笑いが生れてくる。真剣に取り組んでいる二人が創り出す笑いである。公開稽古の後、またチョットずつ進化する。本番では緊張のリキミもなく、楽しみながら掛け合いを楽しむ二人、その空気が客席にも伝わり、大きな笑いもあった。大谷サンの川柳は、二人で平和を願う思いをしっかりと伝えてくれた。

そのこサンは、予定していた「おりん」(再演)(残念ながら中止)に出演を決めたのを機に再び劇団員と

して一緒に活動する道を選んだ。8月の総会で新運営委員に選ばれ、財政部の一員としても意欲的だ。彼女の新鮮な行動力に劇団員は驚いている。(本人が一番ビックリかも)本人に訊いてみると意外な返事、「劇団活動は自分の夢だったので、キツイのはよくわかってるけど、劇団員に戻れてホントに嬉しい」と笑顔で話す。

1984年、第26期研究生『岡田そのこ』の初々しい姿があった。入団して同期の渡辺高志と結婚。年の差14歳。祝う会は小杉の勤労福祉会館に約300名の仲間が集まり盛大であった。舞台出演は「きばのないおおかみ」・「持つということ」・「ある馬の物語」・「さんねん峠」・「ターミナル」・「ジョー・ヒル」・「出航'89」と続く。根倉藤子(故人)のもとで小道具作りにも精を出す「そのこ」の姿があった。子育てや職場や諸々の都合で退団したが、「いのちの砦」・「ミスター・チムニー！」・「赤い太鼓」・「皇国ノ訓導タチ」。「おりん」の客演を最後に再び劇団員として帰って来た。

劇団への思いや、舞台に立ちたいという気持ちがずーっと繋がっていた。30歳と、26歳の二人の娘が自立したのを期に決意を新たにした。子ども時代～青春時代に様々な苦労を経験し、自力で乗り越えてきた人生。辛かった過去があるからこそ、今現在光り輝いているのではないのでしょうか？

これからはこの創造集団で活躍してくれることを期待しているのは私だけではない。

やる気満々。皆様もご期待下さい。



◎文化の仲間通信◎

◆神奈川近代文学館  
キョウカリス  
生誕 100年 金達寿展

日程 2020年12月12日～21年3月14日

09:30～17:00 (入館は16:30まで)

会場 神奈川近代文学館第3展示室

料金 一般260円 20歳未満・学生160円

65歳以上110円 高校生100円 中学生以下は無料

小説の直筆原稿や手紙など約200点を通して、日本人と朝鮮人の相互理解を進めようとした生涯と作品を紹介。

常設展は「文学の森へ 神奈川と作家たち」第2部 芥川龍之介から中島敦まで

問合せ (公財) 神奈川文学振興会 TEL045-622-6666

◆劇団民藝公演 地熱

日程 2021年2月6日(土)～14日(日) (詳細問合せ)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

作 三好十郎 / 演出 田中麻衣子 / 出演 有安多佳子・桜井明美・飯野遠・小杉勇二 ほか

料金 全席指定・消費税込 一般6,600円

夜チケット4,400円 30歳以下3,300円

高校生以下1,100円

作者の故郷を思わせるある炭鉱町を舞台に、少年時代の作者が肉体労働の中で出会った線路工夫、百姓など、働く人々の姿が力強く息づいている。

問合せ・申込み

劇団民藝 044-987-7711 (月～土 10時～18時)

seisaku@gekidanmingei.co.jp

HP: <http://www.gekidanmingei.co.jp>

◆青年劇場公演 小劇場企画 No.25

鮮やかな朝

日程 2月10日(水)～21日(日) (詳細問合せ)

会場 青年劇場スタジオ結 (YUI)

作 森脇京子 / 演出 大谷賢治郎 / 出演 武智香織・蒔田祐子・岡本有紀・池田咲子 ほか

料金 日時指定・自由席 一般4,500円

30歳以下3,000円 中高生シート1,000円

時代に翻弄された生と性。時を超えた命と尊厳の物語…。

問合せ・申込み 青年劇場 TEL03-3352-6922

E-mail: [info@seinengekiyo.co.jp](mailto:info@seinengekiyo.co.jp)



絵手紙 竹間テル子

HP: <https://www.seinengekiyo.co.jp/>

◆原発ゼロへのカウントダウン in かわさき

日程 3月7日(日) 12:00～15:30

集会后デモ行進

会場 川崎市中原平和公園

トークライブ出演 後藤政志・小川仙月・服部浩幸

音楽文化行事・メイン集会

参加費 無料・事前申込み不要

福島原発事故から10年、私たちは忘れない。原発ゼロの政治決断を！ 集会は当日ライブ配信予定。視聴方法は3月上旬に公式サイトで通知。2021年集会の賛同人を募集中(2月末締め切り)。公式サイトから。

問合せ 実行委員会 TEL044-211-0121

(川崎合同法律事務所・三嶋)

公式サイト <http://www.genpatsu-zero.net/>

◆劇団銅鑼公演ドラマファクトリー Vol.12

チムドンドン～夜の学校のはなし

日程 3月18日(木)～29日(月) (詳細問合せ)

会場 劇団銅鑼アトリエ

作 山谷典子 / 演出 藤井ごう / 出演 山田昭二・谷田川さほ・説田太郎・館野元彦 ほか

料金 日時指定自由席・消費税込 一般4,500円

30歳以下・学生3,000円

現代の沖縄。那覇にある自主夜間中学。それぞれの事情で通う若者、おじい、おばあたち。学ぶことって何だろう。

問合せ・申込み 劇団銅鑼 TEL03-3937-1101

(平日 10:00～18:00) [info@gekidandora.com](mailto:info@gekidandora.com)

HP: <http://www.gekidandora.com>

\* \* \* \*

●文化の仲間世話人会からお知らせ

新しい年になりました。会費の納入をお願いします。年会費は、個人会員3,600円、家族会員5,000円です。

本年も、京浜協同劇団と文化の仲間へのご支援、活動へのご参加をよろしく願いいたします。

●文化の仲間ギャラリー● 大谷 敏行⑭

「厳選」大谷敏行の川柳塾

自助と言う 棄民政策 コロナ禍に  
二〇二〇年一月一日『赤旗日曜版』掲載

政治家が 選良だった時もあり  
二〇二〇年一月三日『日本海新聞』掲載

横綱は 君臨すれど勝負せず  
二〇二〇年一月二日『赤旗日曜版』掲載

任命拒否 法治国家を放擲し

新型コロナ 対症療法に終始する

鬼気迫る パンデミックのデストピア